

上後瀬遺跡発掘調査報告

2007(平成19)年3月

三重県埋蔵文化財センター



調査後全景（北から）



上後瀬遺跡出土の瓦器

序

上後瀬遺跡が所在する三重県伊賀市羽根は、流域面積1,663平方メートルにも及ぶ近畿地方を代表する大河、淀川の有力支流である木津川の上流に位置します。

当地は、歴史的にも由緒ある場所で、日本で2番目の正史である『統日本紀』で「伊賀国阿保村」と呼ばれた阿保は羽根集落の東隣りに位置し、古代においては当地も阿保村に包含されていたと考えられています。阿保には聖武天皇や斎王の頓宮も設けられたとされ、また近世には参宮街道の宿場として賑わうように、当地は交通の重要な拠点でもありました。

今回報告する上後瀬遺跡は、松阪青山線地方特定道路整備事業によるものですが、同事業によってはすでに上後瀬遺跡の北側に所在する沢代遺跡が調査されており、古墳時代の貼石遺構など全国的に珍しい調査成果が報告されています。

上後瀬遺跡は、比較的少ない面積の発掘調査ではありましたが、中世前半期頃の生活の跡や、使用された道具類が数多く発掘され、当地の歴史に貴重な一頁を加えることが出来ました。地元の皆様をはじめ、調査に関わっていただいた関係各位に深く御礼申し上げます。

埋蔵文化財は、日本や日本人、あるいはそれぞれの地域が歩んできた営みを、先人が大地に残した生活の痕跡である遺構と日々の生活に使用した遺物、つまり具体的な造形物によって現代の我々に伝えてくれるものということができるでしょう。このように考えれば、埋蔵文化財とは、現代に生きる我々が過去の歴史を振り返り、現在立っている座標軸を確認して、明日への歩みを踏み出す方向を探るひとつの道標ともなりうるものといってよいのではないかでしょうか。

最後になりましたが、本書が過去に学んで豊かな未来像を構築するための材料のひとつとして活用されることを期待いたしますとともに、県民の皆様の埋蔵文化財保存へのより一層のご理解とご協力を念願して序文をいたします。

平成19年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 吉水康夫

例　　言

1. 本書は、伊賀市羽根に所在する上後瀬（かみごぜ）遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、松阪青山線地方特定道路整備事業に伴うもので、最終の調査面積は660m²である。
3. 発掘調査は、次の体制で実施した。
（平成15年度（発掘調査））
調査主体　三重県教育委員会
調査担当　三重県埋蔵文化財センター
　　調査研究Iグループ　主査　山口聰
発掘作業　安西工業（株）
4. 遺構写真撮影は、調査担当者及び調査作業受託機関が行った（上記参照）。
5. 調査にかかる諸費用は、三重県県土整備部が全額負担している。
6. 発掘調査にあたっては、地元青山町（当時、現伊賀市）在住の皆様、青山町教育委員会（当時）、県土整備部道路整備室、伊賀県民局上野建設部（当時）から多大な協力を受けたことを明記する。
7. 本書で報告した記録類及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。
8. 当報告書の作成業務は三重県埋蔵文化財センターで実施し、平成17年度は調査研究Iグループ、平成18年度は調査研究I課が主務として実施した。報告文の執筆・編集は、調査研究I課主査　穂積裕昌が行い、遺物の写真撮影は情報普及課主査　西村美幸が行った。

凡　　例

地図類

1. 本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図、津市都市計画図である。
2. これら地図類は本書で報告した遺跡の位置は、国土座標第VI系を用いたが、平成14年4月から施行されている世界測地系による新座標を併記している。
3. 挿図の方針はすべて座標北で示している。なお、真北は座標北の西偏0度16分、磁北は座標北の西偏6度40分である。

遺構類

4. 土層図の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版 標準土色帖』（日本色研事業株式会社 1967年初版）を用いた。
5. 本書の遺構は連番となっているが、この番号は調査時の遺構番号を踏襲したものである。
6. 遺構名称については、下記の略記号を用いて表示したものがある。
土坑：SK 溝：SD 旧河道・自然流路：SR ピット：pit その他・不明遺構：SZ

遺物類

7. 遺物番号は、遺物の種別（土器や金属器、木製品など）に関わらず、本書内での通し番号で付与した。
8. 本書での遺物実測図は、土器については実物の1／4を基本としたが、石器・金属器・木製品はその都度指示している。
9. 遺物観察表の留意事項を簡単に記す。
 - ・土器観察表の「胎土」は、混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で、混和材が認められる場合は確認できる最大の大きさを計測して表記した（「～〇mm」）。
 - ・土器観察表の「色調」は、その遺物の代表となる色調を記載した。その表記は、前掲『新版 標準土色帖』に拠る。
 - ・土器観察表の「残存」は、当該部位を12分割した際の残存度を示した。また小片は、法量復元ができないほどの小片に対して用いた。
 - ・木器観察表の「樹種」は、整理の過程で樹種同定を経たもののみを記した。

写真図版

10. 挿図と写真図版の遺物番号は、報告書番号と対応している。
12. 遺物の写真図版は、すべて縮尺不同である。

本文目次

第1章	前言	1
	第1節 調査に至る契機と経過	1
	第2節 調査の方法	1
第2章	位置と環境	4
第3章	遺構	7
	第1節 基本層序	7
	第2節 遺構	7
第4章	遺物	12
	第1節 遺構出土遺物	12
	第2節 包含層等出土遺物	17
第5章	まとめ	17

挿図目次

第1図	遺跡周辺地形図	2
第2図	調査区周辺地形図	3
第3図	調査区地区割図	3
第4図	上後瀬遺跡と周辺の遺跡	5
第5図	調査区土層図	8
第6図	調査区遺構平面図	9
第7図	SR30・杭列・SK14実測図	9
第8図	SK 4 実測図	10
第9図	SK 6 実測図	10
第10図	SK 8 実測図	10
第11図	SK12実測図	10
第12図	SK15実測図	10
第13図	SK10実測図	10
第14図	SK16実測図	10
第15図	SK24実測図	11
第16図	SK27実測図	11
第17図	SZ 7 実測図	11
第18図	SZ18実測図	11
第19図	出土遺物実測図	13
第20図	出土遺物実測図	14

表目次

第1表	出土遺物観察表1	15
第2表	出土遺物観察表2	16

写真図版目次

卷頭図版	調査区全景（北から）／上後瀬遺跡出土の瓦器
図版1	調査前風景（南から）／遺構検出状況（南から）
図版2	遺構検出状況（北から）／SK 6（西から）
図版3	SK 4（東から）／SR26（北から）
図版4	SK 7 検出状況（北から）／ SK 7 完掘状況（北から）
図版5	SK 8・9・14検出状況（南から）／ SK 8・9・14完掘状況（南から）
図版6	杭列（南から）／調査後の工事風景
図版7	出土遺物（土器・金属器）
図版8	出土遺物（木製品）

第1章 前 言

第1節 調査に至る経緯と経過

1 調査に至る経緯

上後瀬遺跡は、周知の遺跡である沢代遺跡に隣接して存在する遺跡である。沢代遺跡は、平成5年に川上ダム建設所新設工事に伴い、青山町教育委員会によって発掘調査が実施され、古墳時代中期の堅穴住居13基、奈良時代の掘立柱建物2棟などが確認されている^{①)}。

この沢代遺跡の西半部を縦断する主要地方道松阪青山線地方特定道路整備事業が三重県土木部によって計画された。これを受けて、県教育委員会および三重県埋蔵文化財センターでは、遺跡の保存を巡って県上野土木事務所（当時）と協議を重ねたが、ルートの変更が困難で、最終的に範囲確認調査を経て遺跡範囲が確定した後は記録保存として対応することに合意した。

これを受けて、三重県埋蔵文化財センターでは平成14年に事業対象地11,650m²を対象とした範囲確認調査を実施した。その結果、試掘坑No.2で堅穴住居が確認されたのをはじめ、事業地内の北部6,122m²、やや間を開いた南側680m²の2ヶ所で本調査が必要なことが明らかとなった。

その後、協議の過程で南側680m²が「沢代」ではなく「上後瀬」であることが判明し、沢代遺跡とは途中間隔も開くことからも、この部分を上後瀬遺跡として扱うこととし、本調査は平成15年度に実施することに合意した。

なお、事業地内北部6,122m²（沢代遺跡）は地元青山町（平成17年11月以降は合併に伴い伊賀市）

教育委員会が発掘調査を担当し、平成16年度に発掘調査が実施されている。

2 調査経過

本調査は、11月6日に調査前の段階確認、7日に調査前写真を撮影した後、土日と雨天中止2日を挟んだ11月12日より現地調査を開始した。雨天による調査作業中止の日があったほか、このほか出水も多く、また作業員数が少ない日も多かったことから調査面積が少ないにも関わらず調査に手間取り、年が明けた平成16年1月19日に漸く現地調査が完了した。その後、調査によって損傷した畦畔の補修等を行い、21日午後、現地を引き渡して現地調査を終了した。

最終的な調査面積は、660m²であった。

3 文化財保護法にかかる諸通知

文化財保護法等にかかる諸通知は、以下により県教育長宛に行っている。

- ・文化財保護法に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項（県教育長宛）

平成15年9月22日付け賀建第462号

- ・文化財保護法第58条の2第1項（県教育長宛）

平成15年10月27日付け 教理204号

- ・遺失物法による文化財発見・届出通知（上野警察署長宛）

平成16年2月3日付け 教委第12-9-10号
(県教育長通知)

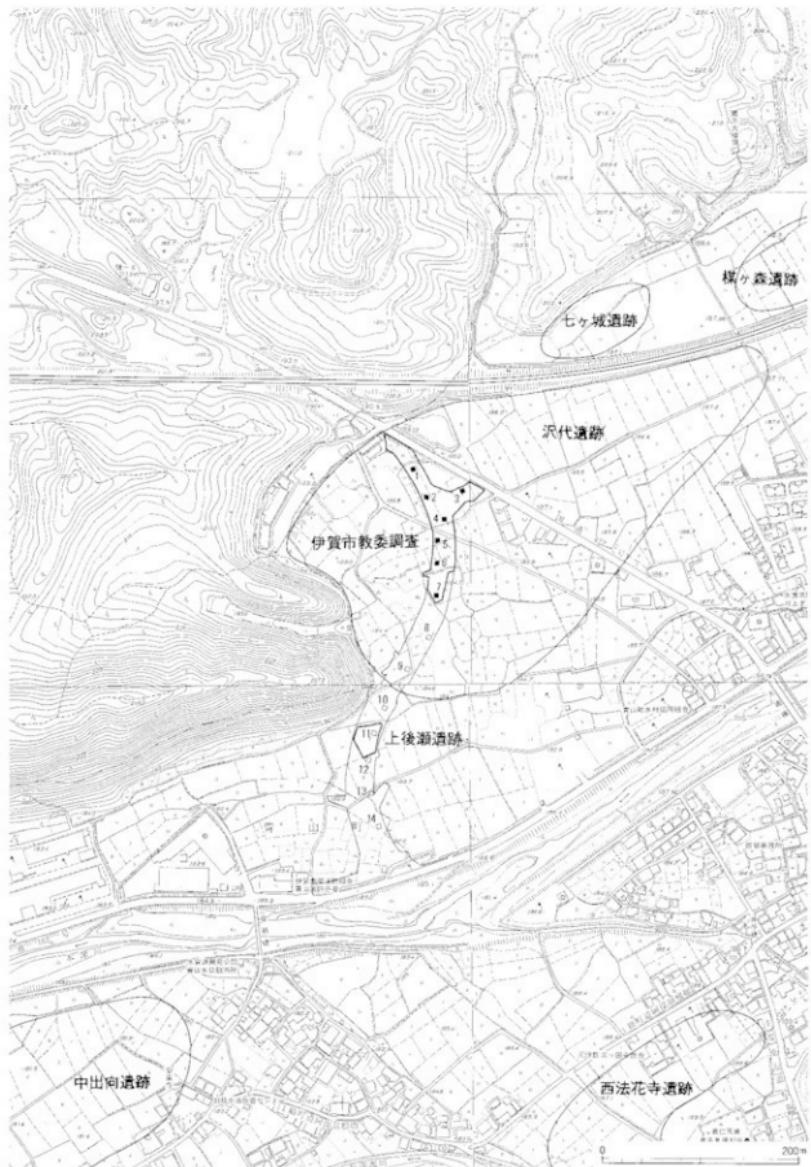
第2節 調査の方法

小調査区の設定 三重県埋蔵文化財センターの調査では、調査区を4m×4mの方眼（小地区）に分割し、それを調査の基本単位となるグリッドの1単位としている。その際、グリッド名の表記は通常グリッドの北西隅を表示原点としており、上後瀬遺跡の調査も同様である。

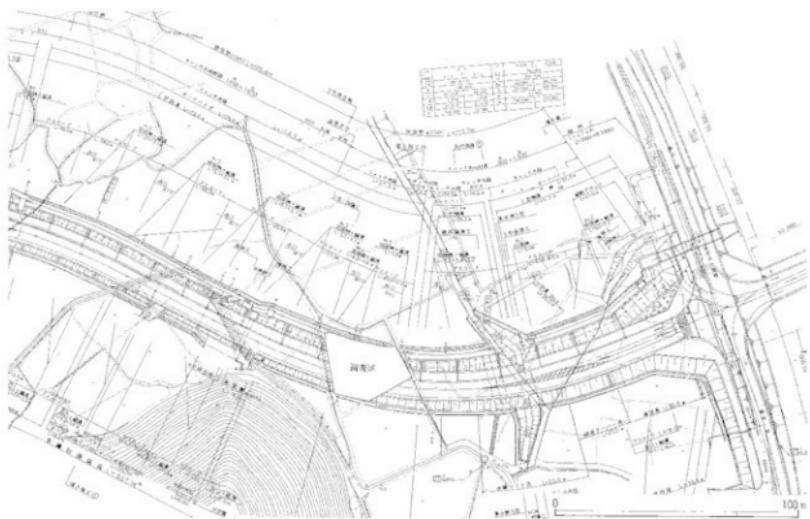
具体的には、調査区の西側から東側へ4mごとに

アルファベットA～Hを、北側から南側へ4mごとに算用数字1～9を付与し、その北西隅交点を小地区表示の基準とした。

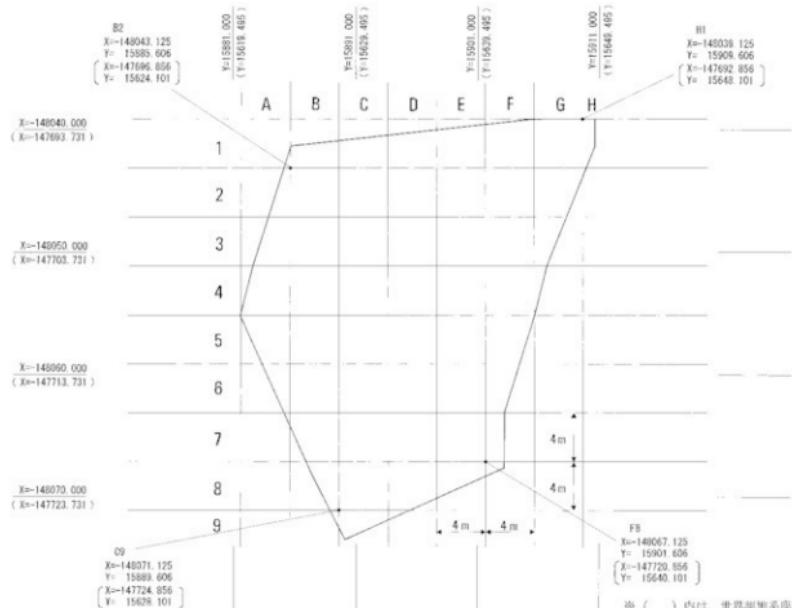
そして、上後瀬遺跡では、調査対象区域が県道路線地内ではあったが、調査区の形状が比較的幅広形状を呈していたため、上記の小調査区設定は国土座標に基づいて一辺4mの方眼を設定するかたちで行



第1図 遺跡周辺地形図（1：5,000）



第2図 調査区周辺地形図 (1 : 2,000)



第3図 調査地区剖面図 (1 : 400)

っている。従って、小地区の南北及び東西軸は、座標の完数値を指向する。

表土除去 包含層より上位は、重機（バックフォー）による表土除去を実施した。

検出・掘削 表土除去後、人力による包含層掘削を実施し、その後、遺構検出を行った。

遺構カード 小地区を単位として1/40で作成し、略図・土質・切り合いを記すとともに、遺物取り上げにおける遺構番号の注記台帳として使用した。

遺構番号の付与 当センターが基本としている発掘調査における遺構番号付与は、ピット以外は遺構種別を超えた遺跡毎の通し番号方式で、本遺跡においてもそれに従った。なお、三重県の調査方式上致し方ないが、遺物遺構はその量や性格に関わらず一律に番号が付与されるため、報告段階で不要と認めた遺構も番号が残る一方、重要性があつても遺物の出土がなければ現場レベルで遺構番号が付与されない

場合も生じる。このため、本書においても、特に前者に関しては、遺構番号があつても必ずしも本文中で説明が加えられているわけではないことを明記したい。

実測 図化が必要と認められた個別遺構図や出土状況図の作成は、基本的に1/10作図で行った。それ以外の調査区土層図と遺構全体図の作成は、1/20作図で実施した。

遺構写真撮影 基本的に4×5インチ判の白黒ネガ・カラーリバーサルで撮影した。また、補助・メモリに35mm判白黒ネガおよびカラーリバーサルも使用した。

遺物写真撮影 報告書掲載遺物から任意に選択し、基本的にプロニード判白黒ネガで撮影した。

註

- (1) 青山町教育委員会『沢代遺跡調査報告書』
1995

第2章 位置と環境

上後瀬遺跡が所在する伊賀市羽根の地は、平成16年11月に当地が伊賀市として合併する以前は名賀郡青山町に属していた。この地は、木津川によって開拓された谷筋が小盆地的な地形を呈する阿保小盆地の西端部を占め、布引山系から流れ出てきた木津川はこの小盆地西側に連なる丘陵（竜王山）に行く手を遮られ、大きく蛇行して流れを北側に転じる。

この阿保小盆地は、地形的には四方を丘陵に囲まれて、中央部を木津川が流れる小さな空間に過ぎないが、古くから多くの遺跡が営まれてきた。

（縄文・弥生時代）

縄文時代に遡る遺跡は、小盆地の縁辺や、阿保小盆地で木津川へ流れ込む小河川が開削した小支谷沿いに多く形成されている。

弥生時代の遺跡は後期のものが多いが、阿保小盆地の東南部に相当する伊賀市柏尾の柏尾湯船遺跡からは現在東京国立博物館に所蔵されている突線錐式銅鐸が出土している⁽¹⁾。同様に、阿保小盆地よりひとつ下流の小盆地（比土・古郡小盆地）に所在する伊賀市比土の下柳賀遺跡からも突線錐式銅鐸の出土があり⁽²⁾、小盆地単位で銅鐸を保有し、集落の結合が進みつつあったことが知られる。

（古墳時代）

古墳時代に入ても、小盆地での集落形成は盛んで、上後瀬遺跡の北東部に位置する沢代遺跡では大型掘立柱建物を含む大規模な古墳時代集落が発掘された他⁽³⁾、桜ヶ森遺跡では古墳時代中後期の居館遺構⁽⁴⁾、また上後瀬遺跡とは木津川を挟んだ対岸になる羽根中島遺跡⁽⁵⁾や中出向遺跡⁽⁶⁾からも大規模な古墳時代集落が確認されている。

このうち、沢代遺跡や桜ヶ森遺跡では、古墳時代の貼石造構が存在することが特筆される。阿保小盆地とは丘陵を挟んだ北側となる伊賀市比土の城之越遺跡⁽⁷⁾（国史跡及び名勝に指定）でも古墳時代の貼石祭儀場が発掘されている。これら貼石を伴う遺構群は、いずれも首長に関わった各種施設群と想定される。また、沢代遺跡では、城之越遺跡ほど精緻なものではないが、古墳時代の湧水施設群も確認されており、貼石造構や大型掘立柱建物の存在とあわせて首長が関与した諸活動の実態を解明するうえで重要な論点を提出している。なお、阿保小盆地内では、後期群集墳は數多く、また埴輪を有する古墳も存在するものの（径35mの方墳である宮内庁所轄の池速別命墓など）、前方後円墳などの有力古墳は存在し



- | | | | |
|-----------|--------------|------------------|----------|
| 1 上後瀬遺跡 | 13 川上官垣内遺跡 | 25 宮内疗所轄速別命墓（方墳） | 37 馬塚古墳 |
| 2 柏尾御磧出土地 | 14 川上中綱手遺跡 | 26 桐ヶ谷古墳群 | 38 貴人塚古墳 |
| 3 比土御磧出土地 | 15 安田中世墓群 | 27 石山古墳 | 39 赤井塚古墳 |
| 4 泽代遺跡 | 16 高瀬遺跡 | 28 王塚古墳 | 40 阿保城 |
| 5 七ヶ城遺跡 | 17 猿之越遺跡 | 29 才良山1号墳 | 41 本田氏城 |
| 6 横ヶ森遺跡 | 18 奥城寺遺跡 | 30 観音寺山古墳 | 42 桃田城 |
| 7 羽根中島遺跡 | 19 高賀遺跡 | 31 猫田神社古墳 | 43 丸山城 |
| 8 木出向遺跡 | 20 浮田遺跡 | 32 天童山古墳群 | 44 山村氏城 |
| 9 花代遺跡 | 21 三石代遺跡 | 33 近代古墳 | 45 我山城 |
| 10 西法花寺遺跡 | 22 下都遺跡 | 34 殿塚古墳 | 46 電王山城 |
| 11 同田遺跡 | 23 才良遺跡・才良廬寺 | 35 女良塚古墳 | |
| 12 同田向遺跡 | 24 馬場西遺跡 | 36 昆沙門塚古墳 | |

第4図 上後瀬遺跡と周辺の遺跡（1：50,000）

ない。沢代遺跡の貼石造構などを形成した集団の奥津城が、古代においては阿保や比土と同じ伊賀郡の地に属した名張市美旗古墳群の一角に包含されるのか、あるいは池速別命墓など阿保小盆地内の有力古墳と対応するのかなど、今後に残された課題は大きい。

(古代)

古墳時代に比して、阿保小盆地での奈良・平安時代の遺跡は不明な部分が大きかった。しかし、沢代遺跡で奈良時代の掘立柱建物群が、西山遺跡⁽⁸⁾で平安時代の掘立柱建物が確認されるなど、古代に属する本地域の遺跡様相も、漸く明らかにされつつある。

一方、文献のうえからは、持統天皇や聖武天皇の伊勢行幸や、伊勢齋王鰐洛時の群行に伴う頼宮が阿保に置かれたことが記されており⁽⁹⁾（持統天皇時は行路からの推定）、当地が畿内と伊勢を結ぶ有力な交通路であったことがわかる。

平安時代初期の延暦3年には、武藏国の介を務めた建部臣人上らが自らの一族の来歴（垂仁帝の皇子である池速別命に由来して命が阿保に住し、子孫がはじめ阿保氏、後に建部を名乗ったこと）を語ったうえで先祖の姓である阿保氏を再び名乗りたいと上申して許されたことなど（『続日本紀』「卷第38」延暦3年11月21日条）、阿保に縁のある豪族層の一端も示されている。

さらに、天喜4年（1056）2月23日付藤原実遠所領譲条案（『東南院文書』）にも阿保村の記載があり、この頃には当地が莊園化されていたとみられる。

今後、文献記載と考古学的調査との対応、すなわち頼宮の位置や阿保氏伝承に関わる遺跡の認定ないしは存否、莊園構造の実態など、当地の果たした歴史的な役割の解明が求められる。

(中世)

当地で確認されているこの時期最大の集落は、上後瀬遺跡の対岸に所在する中出向遺跡で、多数の掘立柱建物や土坑、溝などが発掘されている。また、中出向遺跡の北方に位置する羽根中島遺跡では、掘立柱建物や土坑群、中世墓などが確認されている他、花代遺跡（A地区）でも13世紀の大型掘立柱建物を含む中世遺構が出土している。いずれの集落も、概ね平安時代末から鎌倉時代のものと推定されるが、

一部遺構は室町時代初期に属するものが含まれるようである。このうち、花代遺跡では、一定期間に何度も建て替えが繰り返された建物が検出されているが、一辺14.4mの方形掘立柱建物（SB51）や一辺10.75mの方形建物（SB54）という特異な大型掘立柱建物を含んでおり⁽¹⁰⁾、その性格が注目される。

一方、阿保小盆地の北東隅に位置する伊賀市寺脇では藏骨器を伴う安田中世墓が調査され、中世後期の在地有力者層に伴う中世墓群の一端が明らかとなつた⁽¹¹⁾。安田中世墓は真言律宗に属する宝嚴寺裏山に所在するが、宝嚴寺は金沢文庫所蔵の「持戒清淨印明」本奥書にある「正和三年甲寅、大神宮參詣之時、令寄宿伊賀國阿保庄地藏堂」の地蔵堂に相当するとされ、当時から有力な寺院であった。觀応元年（1350）の石造五輪塔をはじめ多数の石造物があり、また阿保の大村神社の別当寺である禅定寺が明治初年に廃寺となった際に移されたとされる平安後期の木造十一面觀音立像（重文）も有する。

中世後期には、阿保小盆地や霧生や種生、老川、高尾といった周辺の地区に、多数の中世城館が築かれた（旧青山町域で計50ヶ所程度）⁽¹²⁾。これらは、地域的一揆体制を形成していたと推定される在地小領主層を築城主体とするもので、彼らの支配体制は天正9年（1581）に織田勢力の伊賀侵攻によって在地支配が解体されるまで続いた。

以上のように、本地域は、中世城館を含む遺跡以外にも、石造物や仏像、さらに文献への記載など古代以来多くの歴史資料が残存する地域であり、考古資料もこれら資料類との総合的な検討のうえでその位置づけを図っていく必要性が求められる。

註

- (1) 青山町史編纂委員会『青山町史』1984
- (2) 伊賀市『上野市史 考古編』2005
- (3) 伊賀市教育委員会『沢代遺跡（2次）発掘調査報告書』2006
- (4) 青山町教育委員会『七ヶ城遺跡・七ヶ城古墳群・桟ヶ森遺跡調査報告書』1995
- (5) 三重県埋蔵文化財センター『羽根中島遺跡発掘調査報告書』2001
- (6) 三重県埋蔵文化財センター『中出向遺跡（2次）発掘調査報告－本文編－』2000

- (7) 三重県埋蔵文化財センター『三重県上野市比
土 城之越遺跡』1992
- (8) 青山町教育委員会『西山遺跡現地説明会資料』
1996
- (9) 以下、歴史的な内容は、註 (1) 及び平凡社
『三重県の地名』1983を参照
- (10) 青山町教育委員会『花代遺跡（A地区・B地区）
西法花寺遺跡発掘調査報告（遺構編）』2000
- (11) 青山町教育委員会『安田中世墓調査報告』
1988
- (12) 伊賀中世城館調査会による調査

第3章 遺構

第1節 基本層序

調査区の土層は、北壁および西壁を図示した。遺構埋土も含めているため土層数は最終的に22層まで名称貼付を行った。基本的には灰色粘質土（耕作土・1層）以下、暗黃灰色粘土（床土・2層）、灰色系の粘質土（3層～10層）、黒褐色系の砂質土（遺物包含層を含む・11～18層）と続き、遺構検出面となる灰色系の砂もしくは砂礫（19～22層）となる。遺物包含層の上面から切り込む溝もあるが

（6～7層が相当）、これらは時期の新しいものとみなせよう。なお、遺物包含層は、中世期の遺物を中心としているものの、一部弥生時代と近世の遺物を包含している。

全体に、わずかではあるが北から南へ、また東から南へ落ちていく地形を呈しており、遺構検出面のレベルでみれば調査区北東隅と南西隅では約60cm程の比高差が存在することになる。

第2節 遺構

発掘された遺構は、土坑のほか、不明遺構とした土坑状の落込み遺構、それに旧河道・溝などがある。また、ピットは散在的には存在したもの、掘立柱建物としてまとまるものはなかった。以下、個別にみていく。

1 土坑

SK 4 西半が調査区外となるが、長径1.1m以上×短径0.98mの楕円形の土坑である。中央部がより深く落込んでいたり、ピット状を呈する掘り込みもあり、これは他遺構との重複による可能性が高い。検出面より約20cmの深さを有し、床面には縄を伴っている。埋土から、瓦器楕（1）が出土した。

SK 6 調査区の南端に位置し、南側の一部は調査区外となる。しかし、未掘部分も含むとはいえ、全体プランはほぼ長径2.92m×短径1.72m程度の楕円形を呈した土坑である。土坑形成の掘り込みはかなり急角度で行われたようで、検出面より42cmの深さを残す。埋土から瓦器（3～4）が出土した。

SK 8 長径2.64m×短径2.16m、深さ16cmの土坑で、現況では不整形を呈するが、南側のしっか

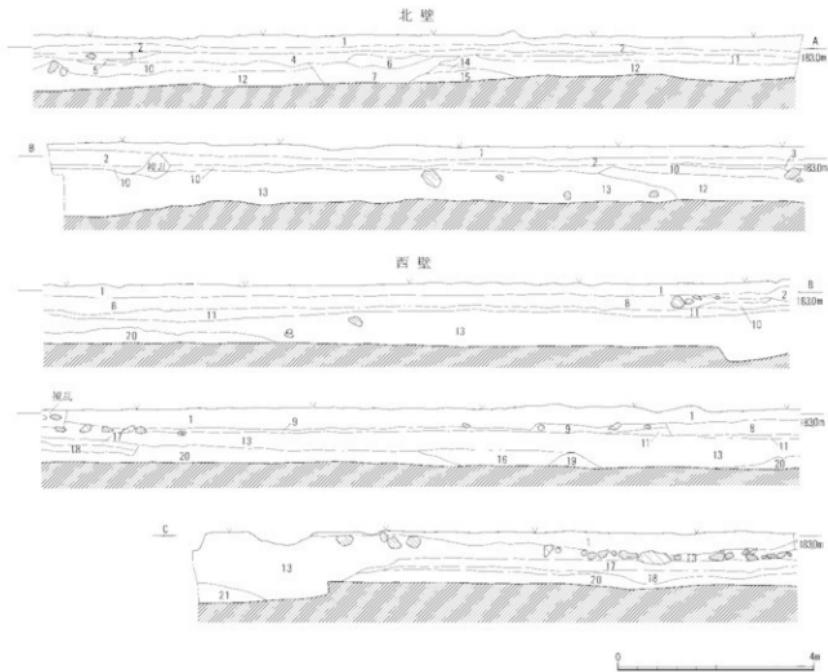
りした掘り込みに対して北側は浅くなっていく状況を示している。埋土から瓦器皿（5）や瓦器楕（6）が出土しているが、いずれも破片である。

SK10 長径0.72m×短径0.46m、深さ15cmの小さな略長方形の土坑である。床面には人頭大の縄が置かれていた。破片ながら瓦器楕（7）や土師器小皿（8）が出土しており、土坑墓的な性格が想定できる。

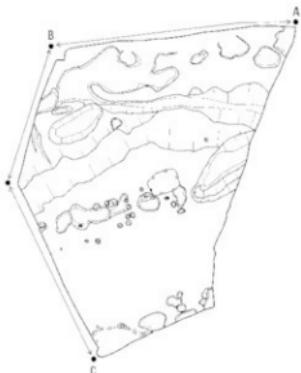
SK12 前述のSK10のすぐ北側に隣接する土坑で、長径2.36m以上（北側が試掘坑によって破壊）×短径1.31m、深さ20cmを測る略楕円形の土坑である。埋土から瓦器楕（12）や土師器小皿（9～11）が出土している。

SK14 調査区北側に所在する長径3m×短径2.4mの不定形土坑である。北側が杭列部に接するように所在しており、遺構の存在形態としては溜井状であるが、深さは10cm弱しかなく、疑問が残る。埋土から瓦器皿（2）が出土している。

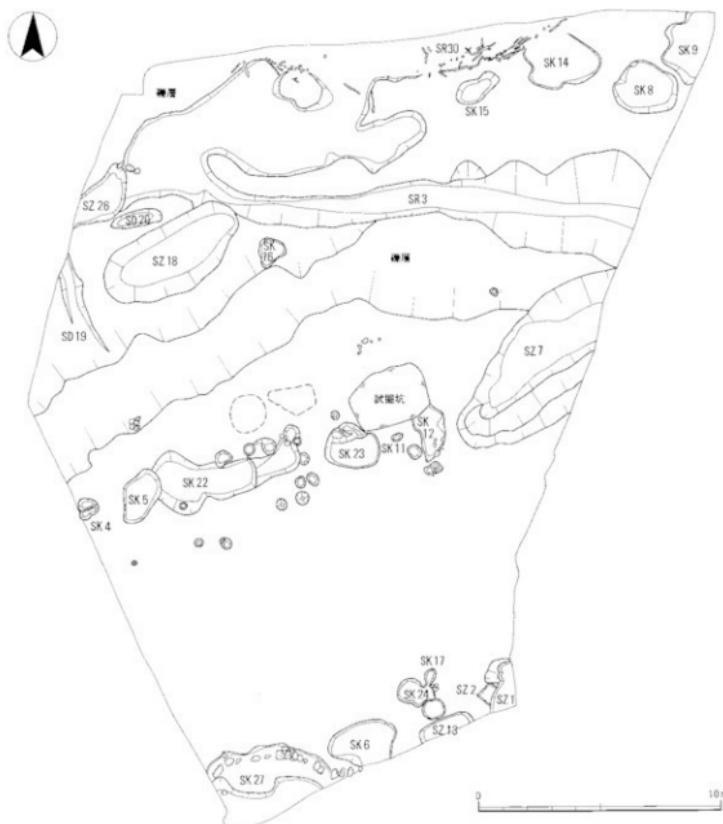
SK15 調査区の北端に所在する土坑で、長径2.04m×短径0.96mの略楕円形を呈し、深さ12cmを測る。埋土から土師器小皿（13）が出土している。



- 1 10YR 4/2 灰黃褐色粘質土(耕作土)
 2 2.5Y 4/2 粗灰黃色粘質土(底土) Fe含む
 3 10YR 3/1 黑褐色粘質土Fe含む
 4 7.5Y 4/1 灰色粘質土Fe含む
 5 2.5Y 3/2 雜オリーブ褐色砂質土(0.1~0.2mm細砂粒含む)
 6 5Y 3/2 黑褐色粘質土(0.1~0.2mm細砂粒含む)
 7 5Y 2/2 オリーブ褐色粘質土(0.1~0.2mm細砂粒含む)
 8 10YR 4/2 灰黃褐色粘質土(砂質多量に混在)
 9 10YR 4/1 灰色粘質土(礫大の礫含む)
 10 2.5Y 4/1 鐵灰褐色砂質土(礫)
 11 7.5Y 3/1 オリーブ風化粘質土 5Y 6/2風化オリーブ色細砂(0.2mm粒) 射^レ含む
 12 2.5Y 3/1 黑褐色粘質土(礫含む)
 13 10Y 3/2~5Y 2/2 オリーブ黑色粘質土
 14 7.5Y 6/2 風化オリーブ粘質土(粗砂0.2mm粒)
 15 7.5Y 3/2 黑褐色粘質土(礫)
 16 2.5Y 2/1 黑褐色粘質土
 17 5Y 3/1 オリーブ集結質土 5Y 4/3風化オリーブ色細砂(0.2mm粒) 含む
 18 2.5Y 3/1 黑褐色粘質土
 19 7.5Y 4/1 灰色砂質土(0.1~0.2mm細砂粒含む)
 20 10YR 4/2 灰黃褐色新質土(砾大よりやや小さい礫まじる)
 21 種層



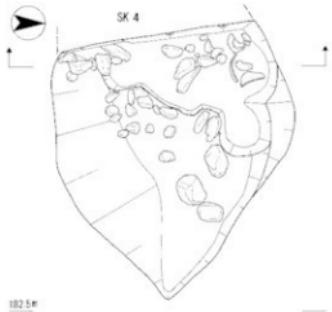
第5図 調査区土層図 (1 : 100)



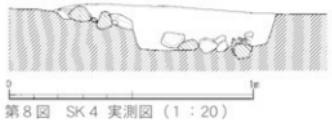
第6図 調査区遺構平面図（1：200）



第7図 SR30・抗列・SK14 実測図（1：100）



182.5m



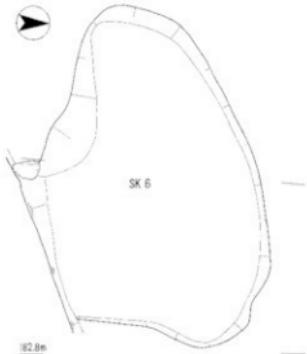
第8図 SK 4 実測図 (1 : 20)



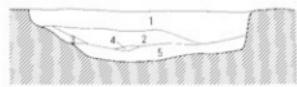
182.8m



第10図 SK 8 実測図 (1 : 40)



182.8m



- 1 5Y2/1 黒色粘質土細砂含む
(2.5Y6/2 細砂質土をブロックで含む)
- 2 2.5Y4/1 黄灰色粘質土粗砂含む
- 3 2.5Y3/1 黄褐色粘土板砂含む
- 4 2.5Y4/3 黄褐色粘土板砂含む
- 5 7.5Y2/1 黑色シルト質土

0 2m

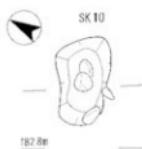
第9図 SK 6 実測図 (1 : 40)



182.8m



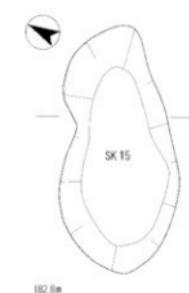
第11図 SK 12 実測図 (1 : 40)



182.8m



第13図 SK 10 実測図 (1 : 40)

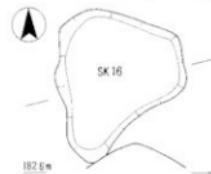


182.8m

2.5Y3/2 黄褐色粘質土



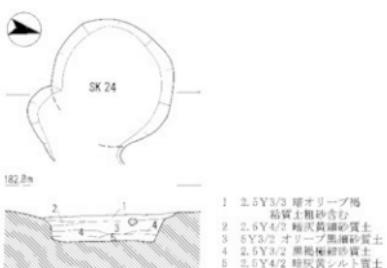
第12図 SK 15 実測図 (1 : 40)



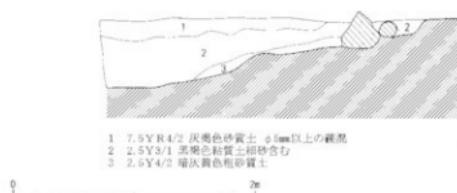
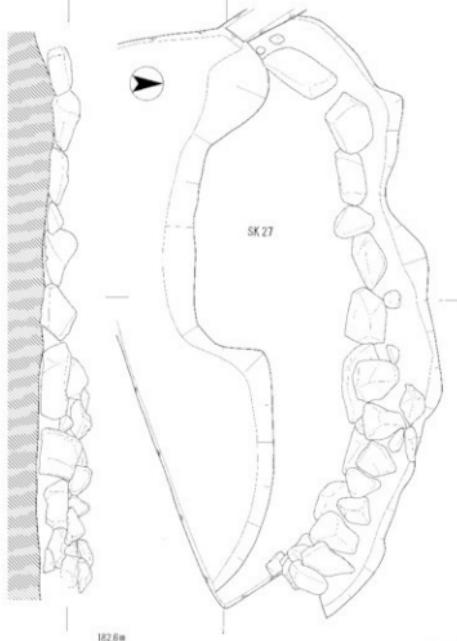
182.6m

2.5Y3/3 深オーリーブ粘質土
(細砂混)

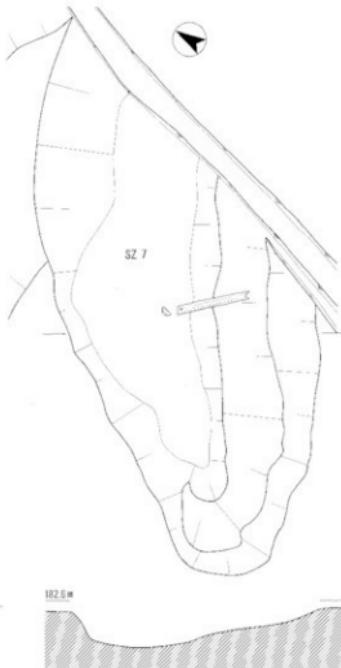
第14図 SK 16 実測図 (1 : 40)



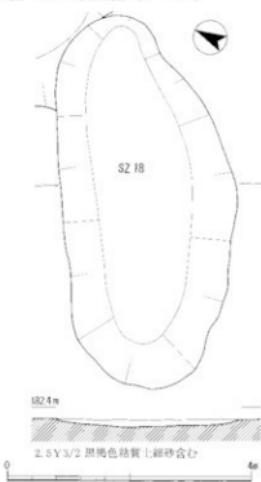
第15図 SK24 実測図 (1 : 40)



第16図 SK27 実測図 (1 : 40)



第17図 SZ 7 実測図 (1 : 80)



第18図 SZ18 実測図 (1 : 80)

SK16 長径1.25m×短径1.08mの不整形な土坑で、深さは16cmを測る。埋土から板状の木製品(14)が出土している。

SK24 東側が別構造の重複を受けているため確認できないが、長径1.07m×短径0.24mの略円形の土坑で、深さ24cmを測る。掘り込みは急角度で、床面は平らである。埋土から、銅鏡(15)が出土している。

SK27 調査区の南西隅にあるため全体形や規模は不明だが、長径4.84m以上×短径3m以上の規模をもち、二段に掘り込まれた土坑である。外側は、外周に礫石を配したテラスを形成し、さらにそこから一段深い掘り込みが形成されている。現状の最深部で高さ56cmを測る。埋土から白磁片(16)が出土している。

2 溝・旧河道

SR 3 調査区の北側に所在する自然流路である。西側に端を発し、東に向かって流れたと思われるが、西側に明瞭な端緒部分はない。流路幅も漸移的に広がっていくことから、常時滞水していた流路というよりは、雨天時当たりにのみ形成された極めて安定性の悪い流路として存在していたものと推定される。調査区内で確認できる規模としては、長さ18m、幅は最下流側となる調査区東壁付近で4.5mを測る

1 遺構出土遺物

SK 4 出土遺物（1） 瓦器椀である。外面に疎らながらミガキを残し、内面見込みは連結輪状文である。

SK14出土遺物（2） 瓦器皿である。ただし、焼しが施されていない。

SK 6 出土遺物（3～4） 瓦器の椀（3）と皿（4）である。椀は、外面ミガキが消失し、器高が低くて法量も小さい瓦器椀として終末期の様相を呈する。

SK 8 出土遺物（5～6） 瓦器の皿（5）と椀（6）がある。いずれも小片である。

SK10出土遺物（7～8） 瓦器椀（7）と土師器

が、深さは10cmもなく、安定した流露ではなかろう。埋土から出土した遺物は多く（17～30）、瓦器碗・皿をはじめ、割材や棒状具等の木製遺物も出土している。

SR30・杭列 調査区北端に所在する長さ18m以上、幅2m以上の流路状の落ち込みであるが、深さは10cm程度しかない。北側は調査区外に延びる。ただ、南岸に沿って杭列があり、山側からの水を制御する何らかの施設であった可能性がある。

3 不明遺構

SZ 7 東側が調査区外となるため全体規模・形状は不明だが、長径9.4m以上×短径4.8m、深さ62cmの楕円形の落ち込みである。明瞭な掘り込みは認められず、特に南側は緩やかに落ち込んでいく。埋土から瓦器碗（31～32）等の土器類や曲物・有孔板材等の井戸関連かと思われる木製品も出土している。本遺構自体は特に井戸を連想させるような遺構上の痕跡はなかったが、溜井的な集水機能のある遺構であった可能性もある。

SZ18 長径6.2m×短径3mの楕円形を呈するが、深さは検出面から18cmと浅い。明瞭な掘り込みはみられず、緩やかなレンズ状の落ち込みであったため、土坑とせざに性格不明の落ち込みと考えた。埋土からサヌカイト製の石鏟片(38)が出土している。

第4章

出土遺物

小皿（8） がある。瓦器椀は、外面ミガキが消失し、器高が浅くなったものである。

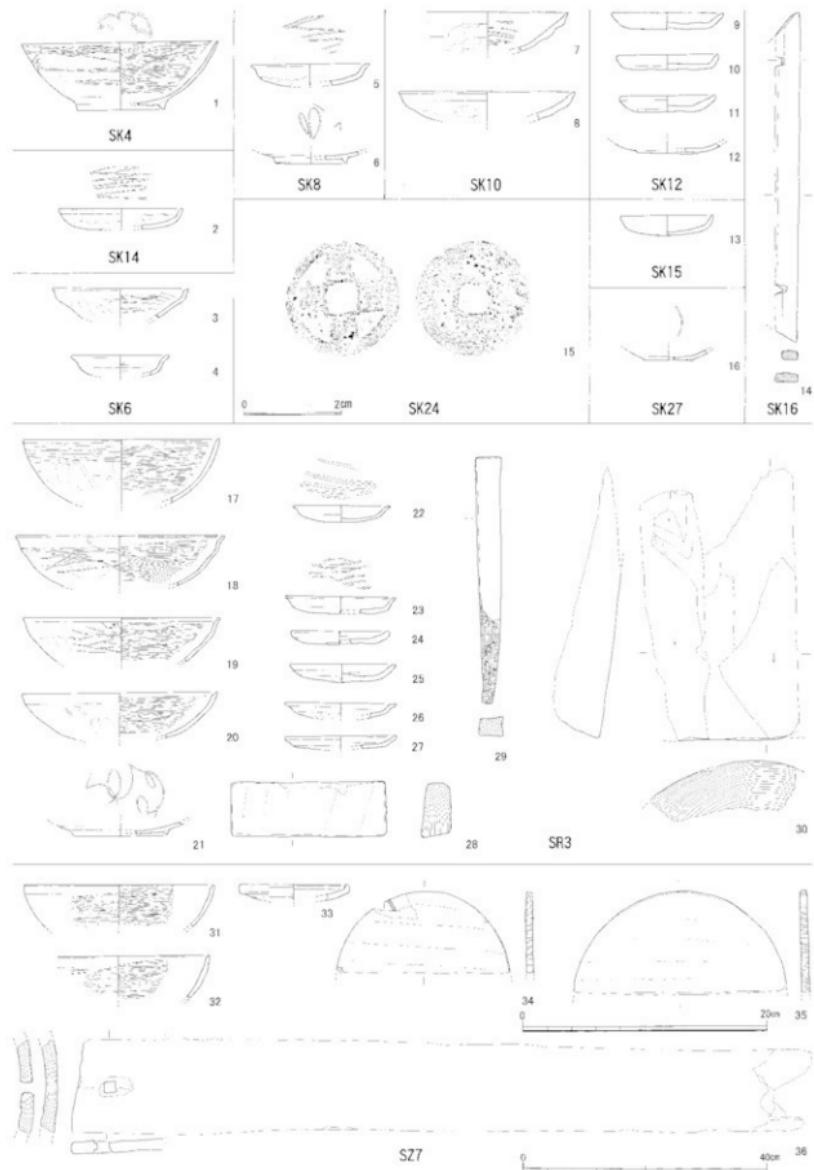
SK12出土遺物（9～12） 土師器小皿（9～11）と瓦器椀（12）がある。10は、底部から屈折して口縁部が立ち上がっている。

SK15出土遺物（13） 土師器小皿である。やや深めの器形を呈する。

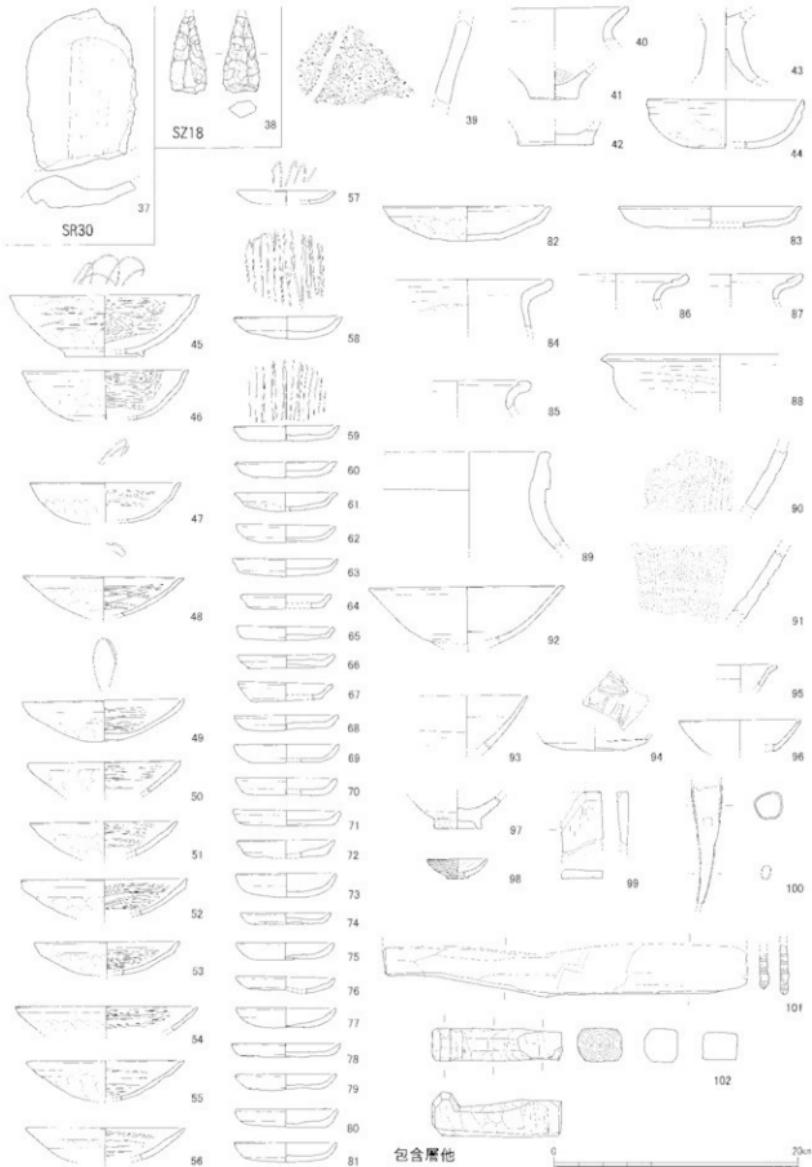
SK16出土遺物（14） 両端が斜めに切り落とされた有孔板材であるが、欠損のため有孔部のところで半截状態になっている。

SK24出土遺物（15） 元豊通宝である。初鑄年代は、1078年である。

SK27出土遺物（16） 瓦器椀である。内面見込みは大振りの螺旋文である。



第19図 出土遺物実測図 (15は1:1、36は1:8、その他1:4)



第20図 出土遺物実測図 (38のみ1:2, その他 1:4)

報告 番号	R No.	質	器形	遺構	計測値				胎土	色調	残存	特記事項	
					口径 (cm)	底面 (cm)	高さ (cm)	重量 (g)					
1	007-08	瓦器	楕	SK4	16.0	7.0	5.5	-	密	灰	N4/0	(D) 6/12	
2	010-03	瓦器	皿	SK4	10.0	-	1.7	-	密(微細粒含)	にじい黄	10YR6/3	(D) 1/12	
3	007-06	瓦器	楕	SK6	11.0	-	-	-	やや密	灰黄	25Y7/2	(D) 2/12	
4	007-05	瓦器	皿	SK6	8.0	-	-	-	やや密	灰	N4/0	(D) 2/12	
5	010-05	瓦器	皿	SK8	9.6	-	-	-	密(微細粒含)	灰	N4/0	(D) 2/12	
6	010-04	瓦器	楕	SK8	-	5.9	-	-	密(微細粒含)	灰白 にじい黄	10YR7/1 5YR6/3	(D) 4/12	
7	009-03	瓦器	楕	SK10	-	-	-	-	密(~2.0mmの砂粒含)	にじい黄	10YR7/3	(D) 小片	
8	009-02	土師器	皿	SK10	14.4	-	-	-	密(~1.5mmの砂粒含)	(外)にじい黄 (内)にじい黄	75Y7/4 5YR6/3	(D) 2/12	
9	009-08	土師器	小皿	SK12	9.2	-	1.35	-	密(微細粒含)	にじい黄	75YR6/4	(D) 3/12	
10	009-05	土師器	小皿	SK12	8.4	-	1.2	-	密(~1.0mmの砂粒含)	にじい黄	75YR7/4	(D) 4/12	
11	009-07	土師器	小皿	SK12	7.6~8.1	-	1.6	-	やや密(~1.0mmの砂粒含)	にじい黄	75YR6/4	(D) 完存	
12	009-06	瓦器	楕	SK12	-	4.8	-	-	密(~1.5mmの砂粒含)	灰白	10YR8/2	(D) 2/12	
13	009-04	土師器	小皿	S K 15	7.6	-	1.65	-	密(~1.0mmの砂粒含)	灰器緑	10YR6/2	(D) 3/12	
14	003-02	木製品		SK16	(長)22.0	(幅)2.0	(厚)0.8	-	樹種: ヒノキ科アスナロ葉	-	-	-	-
15	010-07	木製品	枝	SK24	(長)2.4	-	(厚)0.1	-	-	-	-	-	-
16	009-01	瓦器	楕	SK27	-	4.0	-	-	密(~1.0mmの砂粒含)	(外)にじい黄 (内)灰	10YR7/2 N4/0	(D) 3/12	
17	006-01	瓦器	楕	SR3	16.0	-	-	-	密	灰	N4/0	(D) 2/12	
18	006-02	瓦器	楕	SR3	17.0	-	-	-	密	灰	N4/0	(D) 2/12	
19	006-03	瓦器	楕	SR3	16.0	-	-	-	密	(外)灰白 (内)灰白	23Y7/1 23Y6/1	(D) 2/12	
20	006-04	瓦器	楕	SR3	16.0	-	-	-	やや密	(外)灰黄 (内)灰白	23Y6/2 23Y5/2	(D) 2/12	
21	006-05	瓦器	楕	SR3	-	7.6	-	-	やや密	灰	N4/0	(D) 5/12	
22	006-07	瓦器	皿	SR3	8.0	-	1.3	-	やや密	(外)にじい黄 (内)灰白	10YR7/3 10YR8/2	(D) 2/12	
23	006-06	瓦器	皿	SR3	9.0	-	-	-	密	灰	N4/0	(D) 3/12	
24	007-01	土師器	小皿	SR3	8.0	-	-	-	やや密	(外)にじい黄 (内)灰白	10YR6/4 10YR6/3	(D) 2/12	
25	007-03	土師器	小皿	SR3	8.7	-	1.5	-	やや密	(外)灰黄 (内)灰白	75Y5/5 10YR6/2	(D) 11/12	
26	007-02	土師器	小皿	SR3	9.0	-	-	-	やや密	灰褐色	10YR5/2	(D) 2/12	
27	007-04	土師器	小皿	SR3	9.0	-	-	-	やや密	(外)にじい黄 (内)にじい黄	10YR6/3 75Y5/4	(D) 2/12	
28	002-02	木製品	角材	SR3	(長)12.7	(幅)4.4	(厚)2.4	-	-	-	-	-	-
29	002-03	木製品		SR3	(長)20.1	(幅)2.0	(厚)1.6	-	-	-	-	-	-
30	004-01	木製品	楕	SR3	(長)22.3	(幅)12.7	(厚)4.0	-	樹種: スギ科スギ属スギ	-	-	-	-
31	010-02	瓦器	楕	SZ7	15.7	-	-	-	密(微細粒含)	灰白 N4/0 N5/0	N4/0 N5/0	(D) 1/12	
32	010-01	瓦器	楕	SZ7	-	-	-	-	密(微細粒含)	灰白 N4/0 N5/0	N4/0 N5/0	(D) 小片	
33	009-09	土師器	小皿	SZ7	9.1	-	-	-	密(微細粒含)	にじい黄	75YR6/4	(D) 2/12	
34	001-02	木製品	曲物	SZ7	(直通)14.1	-	(厚)0.6	-	樹種: ヒノキ科アスナロ葉	-	-	-	-
35	001-01	木製品	曲物	SZ7	(直通)12.7	-	(厚)0.6	-	樹種: ヒノキ科アスナロ葉	-	-	-	-
36	005-01	木製品	有孔板材	SZ7	12.22	15.5	2.5	-	-	-	-	-	-
37	007-09	砂岩	石皿	SZ90	(長)13.2	(幅)9.0	(厚)2.9	4250	-	-	-	-	-
38	008-01	サクライド	尖頭器	SZ18	(長)3.1	(幅)1.5	(厚)0.9	427	-	-	-	-	-
39	010-06	織文土器		SK8	-	-	-	-	粗(~3.0mmの砂粒含)	にじい黄	10YR6/3	小片	
40	018-05	土師器	唐	SJ7下層	-	-	-	-	やや密(~1.0mmの砂粒含)	にじい黄	10YR6/3	(D) 小片	
41	019-06	弥生後期	壺	E5壺	-	4.0	-	-	やや密	にじい黄	10YR7/2	(D) 完存	
42	019-07	弥生中期	底部	G2壺下層	-	6.2	-	-	やや粗(~3.0mmの砂粒含)	にじい黄 灰褐色	10YR7/3 10YR6/2	(D) 3/12	
43	018-07	土師器	高杯	D17壺下層	-	-	-	-	やや密(~2.0mmの砂粒含)	灰褐色	10YR6/2	小片	
44	019-05	土師器	楕	B7壺下層	13.0	-	3.9	-	やや粗(~2.0mmの砂粒含)	にじい黄 灰褐色	10YR7/2 N4/0	(D) 1/12	
45	014-01	瓦器	楕	B3壺	15.4	6.4	5.0	-	密	暗灰	N3/0	(D) 1/12	
46	014-02	瓦器	楕	A1壺	13.5	-	-	-	密	灰	5Y5/1	(D) 2/12	
47	014-07	瓦器	楕	C5壺	12.3	-	-	-	密	灰	N4/0	(D) 1/12	
48	014-04	瓦器	楕	A4壺	13.0	-	-	-	密	暗灰	N3/0	(D) 2/12	
49	015-01	瓦器	楕	B3壺	13.2	-	-	-	密(~2.5mmの砂粒含)	にじい黄	10YR7/2	(D) 1/12	
50	015-05	瓦器	楕	C2壺	12.4	-	-	-	密	(内)黄 (外)にじい黄	5YR6/6 10YR7/3	(D) 3/12	
51	014-06	瓦器	楕	C3壺	12.0	-	-	-	密	灰	5Y4/1	(D) 2/12	

上後瀬観察表 (1)

前号 番号	R No.	質	器形	遺構	計測値				粘土	色調	残存	特記事項	
					D径 (mm)	周径 (mm)	高さ (mm)	重量 (g)					
52	014-03	瓦器	板	F4包	13.6	-	-	-	灰	N5/0	(D) 3/12		
53	014-05	瓦器	板	B4包	12.0	-	-	-	灰	N4/0	(D) 2/12		
54	015-04	瓦器	板	レキ層	15.0	-	-	-	灰	10YR8/3	(D) 2/12		
55	015-03	瓦器	板	C4包	13.0	-	-	-	やや密 (微砂粒含)	灰黄	2.5Y7/2	(D) 2/12	
56	015-02	瓦器	板	B3包下層	13.2	-	-	-	密	灰黄	2.5Y7/2	(D) 2/12	
57	015-07	瓦器	皿	D7包	8.0	-	-	-	密	灰	N4/0	(D) 3/12	
58	015-06	瓦器	皿	B2包	8.8	-	1.8	-	密	灰	N5/0	(D) 8/12	
59	015-08	瓦器	皿	B4包	8.6	-	1.2	-	やや密	灰白 にない黒帶	10YR8/2 10YR7/3	(D) 3/12	
60	012-05	土師器	小皿	A4包	8.3	-	1.3	-	やや密 (~1.0mmの小石含)	にない黒帶	10YR7/3	(D) 3/12	
61	011-02	土師器	小皿	G2包	8.4	-	1.5	-	やや粗 (~1.5mmの砂粒含)	洗黄褐	10YR8/3	(D) 2/12	
62	012-06	土師器	小皿	黑褐色土下層	8.2	-	1.4	-	やや密 (~1.0mmの砂粒含)	にない黒帶	10YR7/3	(D) 失存	
63	013-04	土師器	小皿	B4包	8.6	-	1.4	-	やや密 (~1.0mmの砂粒含)	にない黒帶	7.5Y9/6.4 7.5Y9/6.3	(D) 8/12	
64	011-06	土師器	小皿	C4包下層	7.4	-	1.15	-	密	明褐色	2.5Y9/5.6	(D) 3/12	
65	013-05	土師器	小皿	E5包	8.0	7.2	1.1	-	やや密 (~1.0mmの砂粒含)	洗黄褐 にない黒帶	10YR8/2 10YR8/6	(D) 9/12	
66	011-04	土師器	小皿	E3包	8.0	-	1.1	-	やや密 (~1.0mmの砂粒含)	暗灰黒	2.5Y5/2	(D) 3/12	
67	011-08	土師器	小皿	A2包	7.8	-	1.4	-	やや密 (~2.0mmの砂粒含)	灰白 にない黒帶	10YR8/2 10YR7/2	(D) 8/12	
68	011-07	土師器	小皿	A3包	8.5	-	1.2	-	密 (~3.0mmの砂粒含)	にない黒帶 (素地) みじき	10YR7/4 2.5Y9/7.4	(D) 9/12	
69	013-06	土師器	小皿	F2包	8.6	-	1.5	-	やや密	にぶい黒帶	10YR7/3	(D) 4/12	
70	013-07	土師器	小皿	D5包	8.3	-	1.5	-	やや密 (~1.0mmの砂粒含)	極	5Y9/6	(D) 3/12	
F1	012-04	土師器	小皿	B1包	8.8	-	1.25	-	やや密 (~1.0mmの砂粒含)	洗黄褐	10YR8/3	(D) 3/12	
72	013-03	土師器	小皿	B3包	8.0	-	1.4	-	やや密 (~1.0mmの砂粒含)	にない黒帶	10YR7/3	(D) 4/12	
73	012-01	土師器	小皿	B6包	8.2	-	1.9	-	密	にない黒帶 灰灰黒	10YR7/2 10YR6/2	(D) 6/12	
74	013-08	土師器	小皿	C4包	7.4	6.5	0.9	-	やや密 (~2.5mmの砂粒含)	灰白 洗黄褐	10YR8/2 10YR8/3	(D) 5/12	
75	012-03	土師器	小皿	B6包	8.0	-	1.3	-	密 (~1.5mmの砂粒含)	洗黄褐 灰灰黒	2.5Y9/7.3 2.5Y9/7.2	(D) 6/12	
76	012-08	土師器	小皿	E4包	8.2	-	-	-	密 (~2.0mmの砂粒含)	にぶい黒帶	10YR7/3	(D) 失存	
77	011-05	土師器	小皿	F1包	8.2	-	1.6	-	やや密 (~1.5mmの砂粒含)	にぶい黒帶	10YR7/3	(D) 5/12	
78	011-03	土師器	小皿	C5包	9.0	-	1.1	-	やや密 (~1.0mmの砂粒含)	灰灰黒	10YR8/2	(D) 5/12	
79	012-02	土師器	小皿	B6包	8.4	-	1.3	-	密 (~1.5mmの砂粒含)	にない黒帶 にない黒帶	10YR7/3 10YR8/3	(D) 6/12	
80	012-07	土師器	小皿	D5包	8.4	-	1.45	-	密	極	2.5Y9/6.4	(D) 7/12	
81	011-01	土師器	小皿	D4包下層	8.5	-	1.6	-	密	にぶい黒帶 にない黒帶	10YR7/2 10YR7/3	(D) 2/12	
82	013-01	土師器	皿	F5包	15.8	-	2.9	-	やや密 (~1.0mmの砂粒含)	にぶい極	7.5Y9/7.4	(D) 2/12	
83	013-02	土師器	皿	E4包	15.0	-	1.8	-	やや密 (~1.0mmの砂粒含)	洗黄褐 にない黒帶	10YR8/2 10YR7/3	(D) 2/12	
84	018-01	土師器	羽皿	C3包下層	25.2	-	-	-	やや密 (~2.0mmの砂粒含)	にぶい黒帶	10YR6/3	(D) 1/12 大和型	
85	018-04	土師器	羽皿	D2包下層	-	-	-	-	やや密 (~2.0mmの砂粒含)	にぶい黒帶	10YR8/3	(D) 小片 大和型	
86	018-03	土師器	旗	E8包下層	-	-	-	-	やや密 (~2.0mmの砂粒含)	灰黒	7.5Y9/4/2	(D) 小片 球奈伊勢系	
87	018-06	土師器	旗	埋土	-	-	-	-	やや密 (~2.0mmの砂粒含)	にぶい黒帶	10YR6/3	(D) 小片 球奈伊勢	
88	018-02	土師器	旗	E7包	26.4	-	-	-	やや密	にぶい極	7.5Y9/7.4	(D) 1/12	
89	019-01	陶器	甕	D3包	-	-	-	-	やや密 (~1.0mmの砂粒含)	(極) 灰白 (素地) 灰白	N7/0	(D) 小片 信楽製品	
90	017-02	陶器	擂钵	第3層	-	-	-	-	やや密 (~2.5mmの砂粒含)	にぶい黒帶 灰黒	10YR7/3 10YR8/2	小片 信楽製品	
91	017-01	陶器	擂钵	表土	-	-	-	-	密 (~2.0mmの砂粒含)	灰	5Y6/1	小片 腹地不明	
92	016-01	白磁	板	F1包下層	16.0	-	-	-	密	(極) 灰白 黒灰灰白	7.5Y7/1 N6/0	(D) 1/12	
93	016-03	青磁	板	B4包	-	-	-	-	密	黒灰灰白 黒灰灰白	5Y6/2 5Y6/2	(D) 小片	
94	016-06	白磁	小皿	F5包	-	4.6	-	-	密	黒灰オーバー (素地) 灰白	5Y6/1 N7/0	(D) 3/12	
95	016-05	青磁	板	A5包	-	-	-	-	密	黒灰白 黒灰白	10Y7/2	(D) 小片	
96	016-02	白磁	口壳小皿	A6包	10.0	-	-	-	密	(黒) 灰白 (素地) 灰白	10Y7/1 N8/0	(D) 3/12	
97	016-04	磁器	包	-	3.9	-	-	-	密	黒灰オーバー (素地) 灰白	5Y6/2 5Y7/1	(D) 3/12	
98	019-02	磁器	紅皿	表土	5.0	1.7	1.55	-	密	灰白	N8/0	(D) 3/12	
99	019-03	石	礫石	B1包	(高) 4.4	幅) 14	厚) 3.7	20.0	-	-	-	-	仕上げ礫 芝泥
100	017-03	鉄	石突	E1包	(高) 10.0	-	-	-	-	-	-	-	
101	001-01	木製品	-	-	(長) 29.8	幅) 14.0	厚) 5.68	-	-	-	-	-	
102	002-01	木製品	把手	F4包	(高) 10.6	幅) 17	厚) 3.68	-	-	-	-	-	

上後瀬観察表 (2)

SR 3 出土遺物 (17~30) 土器では瓦器楕 (17~21)・瓦器皿 (22~23)・土師器小皿 (24~27)、木製品では厚板 (28~30)・燃えさし (29) がある。瓦器楕は、器高が深く、ミガキ密度も濃い17から、外面ミガキが消失して器高も低くなつた20があり、やや時期幅がある。燃えさし29は、断面方形の棒状具で、片側先端が焼けて尖つてある。厚板30は、表皮に近い部分の破片であり、木取りと残存状況から製材時の分割残材のようなあり様を示す。

SZ 7 出土遺物 (31~36) 土器では、瓦器楕 (31~32)・土師器小皿 (33)、木製品では曲物底 (蓋) 板 (34~35)・有孔板材 (36) を図示した。瓦器楕はいずれも法量が深く、外面のミガキを残す古いものである。また、有孔板材36の有孔部は、やや切込みが雑で、当初の仕事というより2次利用時の仕事の可能性がある。

SR30 出土遺物 (37) 不明石材である。片面に磨耗痕様の擦痕があり図示したが、自然石の可能性もある。

SZ18 出土遺物 (38) 基部及び先端部が欠損しているものの、サスカイト製の石錐であろう。

2 包含層等出土遺物

いわゆる包含層から出土したものや、検出時に出土したもの、採集資料等を一括した。

第5章

わずか660mの狭い調査区ではあったが、上後瀬遺跡では中世前期を中心とした遺構・遺物を確認することができた。最後に今回の調査成果と問題点を簡単に記してまとめたい。

1 遺構について

上後瀬遺跡では、ごく少数のピットは存在したものの、掘立柱建物などの居住施設は確認できず、調査区内で確認できた遺構は専ら土坑や溝、自然流路などであった。そういう意味では、集落の縁辺的な様相を示すことは否めない。しかし、調査区北端のSR30には多量の杭が打ち込まれていたり(第7図参照)、礎が詰め込まれた遺構(SK4)、石組みを作う

土器では、縄文土器 (39)、弥生土器の甕口縁部 (40)・壺腹類の底部 (41~42)・高杯 (43) 古墳時代ないしは古代の土師器杯 (44)、中世の瓦器楕 (45~56)・瓦器皿 (57~59)、土師器小皿 (60~81)・皿 (82~83)・甕 (84)・鍋 (85~88)、信楽焼の大甕 (89)と擂鉢 (90)、產地不明の陶器擂鉢片 (91)、白磁楕 (92)と小皿 (94・96)、青磁楕 (93・95)、近世の磁器楕 (97)と紅皿 (98)を図示した。また、石製品では仕上げ砥石 (99)、金属製品では不明鉄製品 (100)、木製品では板材 (101)と把手状品 (102)を図示した。

縄文土器39は、深鉢の小片と思われるもので、沈線は確認できるが磨耗が激しく、縄文施文等の詳細は不明である。土師器小皿は、底部からの口縁部立ち上がりが明瞭なもの (65や67など)と不明瞭なもの (77など)がある。

瓦器のうち、49~50、54~56・58は焼しがない。また、53は、重ね焼の影響か、焼しの及ぶ範囲が全体の半分以下となっている。

白磁小皿のうち、96はいわゆるロハゲの白磁である。紅皿98は、外面に型押によるキザミが表され、内面には工具によるナデ痕跡が残るもので、高台は削り出され、残存部全体に施釉が及んだものである。

不明鉄製品100は、薄膜状の鉄板を断面方形に巻き継じたもので、中央部に鉛を打ったらしい痕跡が残る。槍の石突のようなものであった可能性がある。

まとめ

遺構 (SK27)など、人間による自然の管理を窺わせる遺構も存在していた。

これら遺構は、調査時点の知見ではあるが出土が多いのが特徴で、地形的に丘陵部を背に、調査地が湧水の多い地形的条件にあったことを示すものと思われる。つまり、土坑や流路に打ち込まれた杭は、横板などは残存しなかったものの、基本的には水を制御するためのものであったと推定される。

以上のように考えれば、例えば調査区で確認されたため全体の構造を捉えることはできなかったが、SZ7などは溜井的な性格をもつた遺構であった可能性も浮上しよう。

つまり、上後瀬遺跡は、湧き出る水を制御して近

傍にあったであろう集落ないしは生産城を安定的に経営するための「場」の一角であったと推定される。遺跡内から一定量の出土遺物のあることも、調査地の近傍に集落などが存在していたことを微証するものではある。

2 遺物について

上後瀬遺跡では、サヌカイト製の石錐など弥生時代と推定される遺物などもごく少量出土したもの、大部分は中世に属する瓦器や土師器小皿であつた。これら多くは、いわゆる供膳具形態で、鍋や羽釜といった煮沸形態を示す遺物はないわけではないものの、小片のものがごく少量出土したにすぎない。

所属時期については、伊賀における瓦器の消長を10期に分類整理した福田典明氏の編年案⁽¹⁾を参照すると、1期や2期に属するような古い段階の資料はSK4出土の17やSZ7出土の31~32など少数で、出土遺物の中心は外面ミガキが消失する5期から高台が完全に欠落するもかろうじて椀状の形態を残す9期頃までにあると推定される。これは、福田編年による暦年代推定の12世紀後半から14世紀初め頃に相当し、上後瀬遺跡の中心がこの時期にあったことを伺わせている。

なお、伊賀における瓦器の終末は、山田猛氏による先駆的研究⁽²⁾以来、大和とは異なって半球状の器形を呈さず、器高が徐々に浅くなって、皿状の形状を呈することが指摘されている。これら終末期の瓦器は、現状では名張市滝野氏城跡⁽³⁾や、伊賀市羽中島遺跡⁽⁴⁾・安田中世墓⁽⁵⁾（ともに上後瀬遺跡と同じ旧青山町域の阿保小盆地内に所在）など、いずれも南伊賀の地域で出土例が断片的に確認されている。上後瀬遺跡では、直接終末時期に相当する瓦器の出

土はなかったが、今後、伊賀における終末期（福田編年の10期）の瓦器生産・流通がどのようなものであったか注視していく必要がある。

このことを考えるうえで若干注意すべき資料が上後瀬遺跡から多く出土した焼しのかからない「白い」瓦器の存在である。これは、形状や調整の特徴は瓦器であるが、瓦器製作の最終工程である焼す行為を省略したままか、不充分であった資料と捉えられる。これらを焼しがないので「瓦器」と呼称してよいかどうかはともかく、こうした資料は同じ南伊賀の三石代遺跡⁽⁶⁾でも多く確認されており、一定の流通には乗っていたようである。上後瀬遺跡における焼しのない「瓦器」は、楕のみならず2や22、59など皿にも及んでおり、これが瓦器としての最終末期のみにみられる現象ではないことは注意してよい。今後、こうした焼し工程を省略した瓦器楕・皿の分布や消長の詳細を確認することも、当地域における瓦器の生産・流通を考えるうえでひとつ課題となるであろう。

註

- (1) 福田典明『伊賀地域における瓦器にかんする覚書』『中近世土器の基礎研究』XX 日本中世土器研究会 2006
- (2) 山田猛『伊賀の瓦器に関する若干の考察』『中近世土器の基礎研究』II 1986
- (3) 名張市遺跡調査会『滝野氏城址』1986
- (4) 三重県埋蔵文化財センター『羽根中島遺跡発掘調査報告』2001
- (5) 青山村教育委員会『安田中世墓発掘調査報告』1988
- (6) 三重県埋蔵文化財センター『三石代遺跡発掘調査報告』2007



調査前風景（南から）



遺構検出状況（南から）

図版2



遺構検出状況（北から）



SK 6（西から）



SK 4 (東から)



SK26 (北から)

図版4



SK 7 検出状況（西から）



SK 7 完掘状況（西から）



SK 8・9・14検出状況（南から）



SK 8・9・14完掘状況（南から）

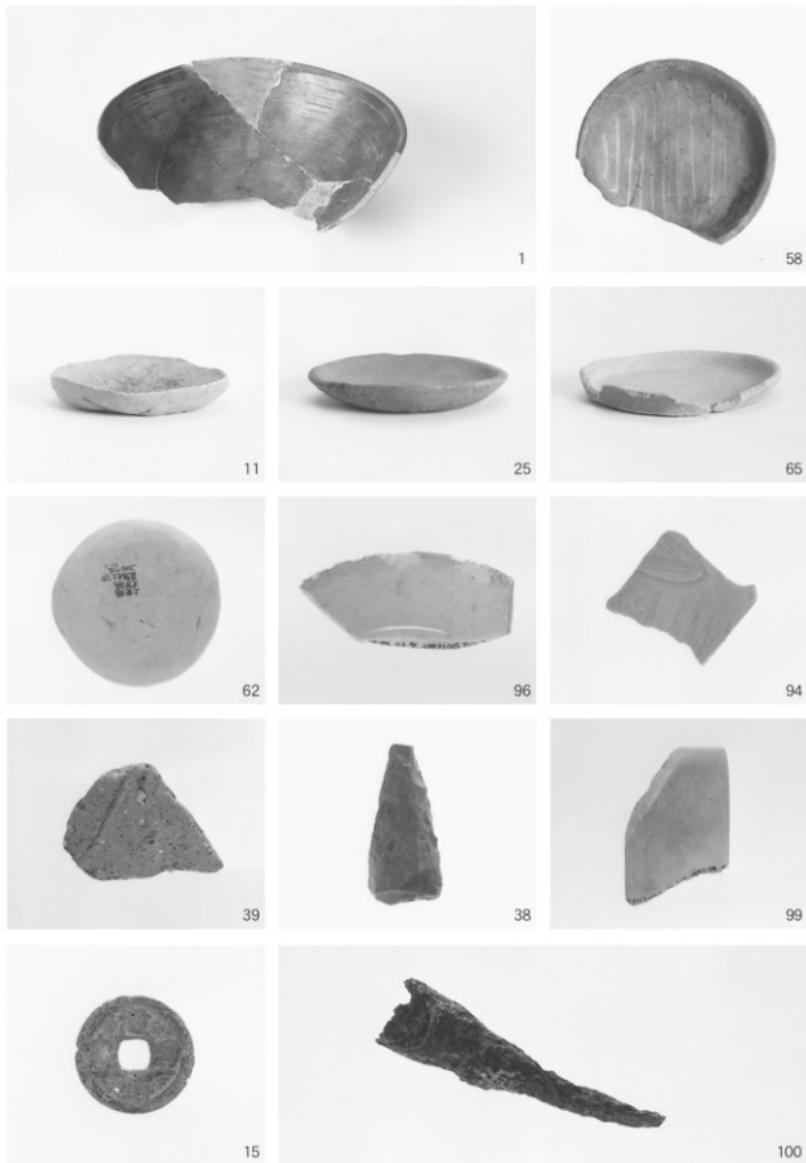
図版 6



抗列（南から）



調査後の工事風景



出土遺物（土器・金属器）

圖版 8



出土遺物（木製品）

報告書抄録

ふりがな	かみごぜいせきはつくつちょうさほうこく						
書名	上後瀬遺跡発掘調査報告						
副書名							
卷次							
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	283						
編著者名	穂積裕昌						
編集機関	三重県埋蔵文化財センター						
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596(52)1732						
発行年月日	西暦 2007年 3月23日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
かみごぜいせき 上後瀬遺跡	い賀市羽根字 上後瀬	216 f	34度 40分 14秒	136度 10分 16秒	20031022 ～ 20040121	660m ²	松阪青山線 地方特定道路 整備事業
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
上後瀬遺跡	集落跡	中世	土坑・溝・流路	瓦器・土師器・陶器・ 木製品	流路・土坑から土器		

三重県埋蔵文化財調査報告283

上後瀬遺跡
発掘調査報告

2007(平成19)年3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印 刷 株式会社アイプレーン

